

年 月	内 容
1940年 7月17日	イギリスの南ウェールズに生まれる。
1958年 4月～9月	カナダでP・M・ドライバー博士の助手としてアンガバ湾探険。ケワタガモの生態を研究。
1959年 4月～9月	P・M・ドライバー博士の助手としてベルチャー諸島(ハドソン湾)探険。ケワタガモの生態を研究(カナダ)。
1960年 4月～10月	ランディ島(英国ブリストル海峡)鳥類保護区域の副監視員(これに先立ち、英国のチェルトナムにあるセント・ポール教員養成大学で数ヶ月を過ごす。その他、英国西部の町々でプロレスラーとしてリングにのぼったこともある。出場試合数25回)
1961年4月 ～1962年10月	デボン島探検隊の越冬隊員となる。全般的な補助、および気象観測を担当。生物学・湖沼学・氷河学・気象学・考古学など各方面の学者の助手をつとめる。
1962年 10月	空手修行のため初来日。この頃、渋谷の東京イングリッシュセンター(ラボ教育センターの前身)で英会話を教える。
1963年 5月～9月	カナダ水産調査庁北極生物局の技官としてグレート・ベア湖の調査を目的にした短期探険のため、カナダに戻る。
9月	空手修行のため日本に戻る。渋谷のナガヌマ日本語学校で日本語も勉強。
1965年 1月	カナダに戻る。北極生物局の捕鯨技官に就任。東部カナダにおけるナガスクジラの個体数を研究。最終的には北極でアザラシ、シロイルカ、セイウチの研究にまで進む。これらカナダ政府の調査機関に所属している間、下記の探険に参加。
2月	ライオネル・ジョンソン博士の助手としてグレート・ベア湖の冬季研究を行う。このときは氷上を人の力で荷物を引っ張りながらの探険であった。
3月	セント・ローレンス湾で氷原に繁殖するタテゴトアザラシを研究。
1966年 6月～10月	バフィン島南部探険に参加。前任技官として調査船「ガラナス号」に乗り込み、イヌイットとアザラシの群の個体数の相互関係を研究。
1967年 3月～9月	引き続きバフィン島南部でイヌイットとともに狩猟生活をしながら探険を続け、イヌイットと海洋性哺乳類動物との相互関係を研究。(北極生物局に在職していたこの期間中、日本の捕鯨船団に同行して2回、ノルウェーの捕鯨船に同乗して1回、捕鯨漁に参加する。この他、カナダ沖で行ったアザラシに標識をつけるための調査探険にも3回参加する。)
1967年9月 ～1969年9月	エチオピア帝国政府野生動物保護省の猟区主任管理官に就任。その任務は新しく計画中のシミアン山岳国立公園を開発し保護することであった。
1969年 9月下旬	漁業の研究のために日本に戻る(日本大学特別研究生)。日本語を勉強(ナガヌマ日本語学校・渋谷)渋谷のラボ教育センターで英会話を教える。ラボを主宰する詩人・谷川雁のすすめで、ラボのテキストを書くようになる。N.Y.の出版社からエチオピア体験記を綴った初めての著作「From the Roof of Africa」を刊行。
1969年9月 ～1972年	カナダに戻り、計画中であった北極海＝マッケンジー溪谷間パイプラインの環境に対する影響調査プロジェクトの主任技官となる。漁業調査局淡水研究所の委嘱を受けてマニトバ州のウィニペグを基地として活動。この期間に下記の探検に参加する。 ①犬ゾリによるマッケンジー・デルタおよび北極海への冬季探険。海洋学、湖沼学上の標本採集を行う。 ②4月から10月にかけてマッケンジー全域およびユコン地方を数次にわたって探険。 ③北極海およびマッケンジー・デルタをスノーモービル、雪上車で探険(冬期)。 ④タイガ(悪寒帯林)地帯に点在する湖で計画中の地元民の専門漁業の諸問題を調査するため調査所の「キャンプ・ボス」として3月から10月にかけてノースウェスト・テリトリーのチティー・レイク地方を探険。

年 月	内 容
1970年 10月	「たぬき」をラボ教育センターより刊行。
11月	「すてきなフフ家」をラボ教育センターより刊行。
1972年 9月	バンクーバーにある環境保護局の西海岸担当エマージェンシー・オフィサーに昇進。石油・化学薬品の流出など環境破壊を及ぼす非常事態に適切な対応処置をとる。
1973年12月 ～1974年1月	瀬戸内海水島製油所の石油流出に対する日本の事故処理視察のため来日。
1975年6月 ～1976年2月	カナダ政府環境庁を代表し、カナダ館副館長として沖縄海洋博への派遣を命ぜられる。
1977年4月 ～1978年4月	カナダ政府の役職を辞任、新しく設立された環境保護コンサルタント会社カンガード社（バンクーバー）の作戦本部長に就任。各種の石油・化学薬品の流出事故の処理、および、カナダ政府とはほとんど対照的に、新しい事故処理装備の研究開発を担当する。
1977年 8月	「ドゥリトル先生海をゆく」（訳・ヒュー・ジョン・ロフティングほか）をラボ教育センターより刊行。
1978年 6月～9月	住友系企業の仕事でカナダのユコン州での鱈の魚礁を探索。
1978年 9月	カナダ芸術協会の助成金を得て、江戸期から明治に及ぶ日本の捕鯨をテーマにした歴史小説を執筆するため、日本に戻る。取材のため和歌山県太地に1年間滞在。 「落葉千枚（東村山市民叢書）」（訳・英語のおさらい会）を東村山市民立図書館出版より刊行。
1979年 11月	「ティキシィ」（訳・松田銑）を角川書店より刊行。
12月	「国生み」（訳・らくだこぶに）をラボ教育センターより刊行。
1980年 1月～4月	共同捕鯨の船団に同乗して南極へ行く。
5月	「りんごの花さく湖」（訳・五木寛之）を偕成社より刊行。
1980年～	長野県の黒姫に居を定める。以来、中国、内モンゴル、オーストラリア、ボナペ、フランス、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、西表、北海道、その他多くの場所を歴訪。雑誌記事、単行本、テレビ番組の取材を行う。
1981年 6月	第5回 日本放送作家脚本懸賞に応募。 創作TVドラマ「バーナード・リーチの日時計」一位入賞。同作品はNHKでテレビドラマ化。 「冒険家の食卓」（訳・松田銑）を角川書店より刊行。
1982年 8月1日	「バーナード・リーチの日時計 青春の世界武者修行」（訳・松田銑）を角川書店より刊行。
1983年 5月1日	「ぼくのワイルド・ライフ」（訳・竹内和世）をクロスロードより刊行。
12月	日本語で書いた小説、「風を見た少年」をクロスロードより刊行。
1984年 3月1日	「北極探険十二回」を潮出版社より刊行。
4月	「開高健とC. W. ニコルの野性の呼び声」（共著・開高健）を集英社より刊行。
11月	「ザ・ウイスキーキャット」（訳・森山徹）を講談社より刊行。
11月	「ニコルの青春記「おや？今だれかおならした？」の巻」（訳・竹内和世）を集英社より刊行。
1985年 9月	「野性との対話」（訳・蔵野勇）を講談社より刊行。
10月	「小さな反逆者」（訳・鈴木晶）を福音館書店より刊行。
10月	「ニコルの青春記「イタズラのススメ」の巻」（訳・竹内和世）を集英社より刊行。
11月	「流浪の詩C. W. ニコルのフォークソング（第2版）」（訳・高橋）をテック・ラボ教育センターより刊行。

年 月	内 容
1986年	<p>5月 「C. W. ニコルの自然記(実日新書) 森と山からのメッセージ」(訳・竹内和世)を実業之日本社より刊行。</p> <p>7月 「ユニコーンとレプラコーン(文研子どもランド)」(共著・マーガレット・スミス)を文研出版より刊行。</p> <p>8月 「おっとっと！チョコチョコくん(文研の創作えどうわ)」(訳・薫科れい)を文研出版より刊行。</p> <p>12月 「私のニッポン武者修業」(訳・松田銑)を角川書店より刊行。</p>
1987年	<p>4月 「勇魚(いさな)」(訳・村上博基)を文藝春秋出版より刊行。</p> <p>5月 「C. W. ニコルの海洋記くじらと鯨捕りの詩」(訳・竹内和世)を実業之日本社より刊行。</p> <p>11月 「でっかく遊べ。C. W. ニコル・柘植久慶の冒険対談」(訳・柘植久慶)を原書房より刊行。</p> <p>11月 「C. W. ニコルのいただきます」(訳・竹内和世)を小学館より刊行。</p> <p>12月 「C. W. ニコルの旅行記 わが地球に一乾杯！」(訳・竹内和世)を実業之日本社出版より刊行。</p>
1988年	<p>5月 「森からの警告 畑正憲vs. C. W. ニコル対談集」(共著・畑正憲)をソニー・マガジズより刊行。</p> <p>7月 「C. W. ニコルの野性記(実日新書) 生きることそれは冒険！」(訳・竹内和世)を実業之日本社出版より刊行。</p> <p>12月 「C. W. ニコルのわたしの自然日記」(訳・竹内和世)を講談社より刊行。</p>
1989年	<p>8月 「白河馬物語」(訳・村上博基)を文藝春秋より刊行。</p> <p>9月 「C. W. ニコルの黒姫日記」(訳・竹内和世)を講談社出版より刊行。 カナダ商工会議所よりカナダと日本の親善のために、もっとも貢献したカナダ人として表彰される。</p> <p>11月 「C. W. ニコルと21人の男たち」(訳・竹内和世)を潮出版社出版より刊行。</p> <p>12月 日本環境庁「環境と文化に関する懇談会」委員となる。</p>
1990年	<p>1月 「C. W. ニコルの森と海からの手紙」(訳・竹内和世)を講談社出版より刊行。</p> <p>4月 「CWニコルの忘れ得ぬ人びとPeople from a Boyhood Wales」(訳・信田勇)を桐原書店より刊行。</p> <p>5月 「C. W. ニコルの青春記英語版」(訳・竹内和世)をニュートンプレス出版より刊行。</p> <p>10月 「Forest」(訳・竹内和世)を徳間書店より刊行。</p>
1991年	<p>2月 「Tree」(共著・宮崎駿)を徳間書店より刊行。</p> <p>4月 「りんごの花さく湖」(訳・五木寛之)をファンハウスより刊行。</p> <p>9月 「白い雄鹿」(訳・竹内和世)を講談社出版より刊行。</p> <p>12月 「エコ・テロリスト」(訳・竹内和世)を清水弘文堂書房より刊行。</p> <p>12月 「北極カラスの物語」(訳・森洋子)を講談社より刊行。</p>
1992年	<p>4月 「森を愛さぬ日本人」を全国学校図書館協議会より刊行。</p> <p>6月 「魔女の森」(訳・今井宏明)を講談社より刊行。</p> <p>7月 「C. W. ニコルの黒姫通信」(訳・森洋子)を講談社出版より刊行。</p>
1993年	<p>2月 「小さな反逆者」(訳・鈴木晶)を講談社出版より刊行。</p> <p>7月 「C. W. ニコルのアウトドアクッキング」(訳・竹内和世)を講談社より刊行。</p> <p>10月 「Whisky C. W. ニコルのスコットランド紀行」(訳・森洋子)を徳間書店より刊行。</p> <p>11月 「陸軍少佐夫人」(訳・鈴木晶)を集英社より刊行。</p> <p>「Letters赤鬼からの便り」(訳・森洋子)を徳間書店より刊行。</p> <p>12月 「Mogusわが友モーガス」(訳・鈴木竜一郎)を小学館より刊行。</p>

年 月	内 容
1994年	1月 「森を継ぐものForest handbook」をKDDクリエイティブより刊行。 12月 「ニコルの森の時間」(訳・森洋子)を読売新聞社出版より刊行。 長年提唱していたレンジャー養成のための学校「東京環境工科専門学校」(自然保護学校)が設立され、副校長となる。同年、総理大臣の諮問委員会「21世紀地球環境懇話会」の委員となる。
1995年	7月 「帰ってきたtanuki」(訳・森洋子)を実業之日本社より刊行。 日本国籍取得。7月10日をもって、日本人「ニコル・シーダブリュ」(正式な日本人名)となる。
1997年	3月 「人と自然」を朝日出版社より刊行。 4月 「信州の四季写文集」(写真・上条光水)を講談社より刊行。 「釧路湿原」(写真・後藤昌美)を時事通信社より刊行。
1998年	6月 「C・W・ニコルのおいしい交友録」(訳・竹内和世)を清水弘文堂書房より刊行。
1999年	1月 「スケッチの音」(訳・関川都)をMPCより刊行。 8月 「C・W・ニコルの「人生は犬で決まる」」(写真・鈴木龍一郎)を小学館出版より刊行。 9月 「盟約」(訳・村上博基)を文藝春秋より刊行。
2001年	6月 「日本海軍地中海遠征記若き海軍主計中尉の見た第一次世界大戦」(著者・片岡覚太郎／編・監修 C・Wニコル)を河出書房新社より刊行。 7月 「わが空手修業記」を講談社インターナショナルより刊行。 8月 「日本まさに荒れなんとす 人を幸福にする「森」と「都市」の思想」(訳・黒川紀章)を致知出版社より刊行。 10月～ 東京新聞に「C・Wニコル徒然の記」を3ヶ月にわたって連載。(10月15日から12月28日まで62回) 10月 「自然記C. W. ニコルの世界」(訳・竹内和世)を河出書房新社より刊行。 11月 「海洋記C. W. ニコルの世界」(訳・竹内和世)を河出書房新社より刊行。 12月 「森と海からの手紙C. W. ニコルの世界」(訳・竹内和世)を河出書房新社より刊行。
2002年	1月 「私の自然生活C. W. ニコルの世界」(訳・竹内和世)を河出書房新社より刊行。 2月 「ザ・ウイスキー・キャットC. W. ニコルの世界」(訳・松田銑)を河出書房新社より刊行。 5月 「(財)C.W.ニコル アファンの森財団」を設立、理事長となる。 7月 「裸のダルシン」を小学館より刊行。 8月 「いとときの闇」(訳・太田大八)を佼成出版社より刊行。 9月 「C・W・ニコルのボクが日本人になった理由」(写真・南健二)を刊行(発行・ビオシティ／発売・信山社販売)。 「遭敵海域」(訳・村上博基)を文藝春秋より刊行。
2003年	8月 NHK人間講座に出演。番組は8回シリーズ。そのテキスト「森から未来をみる 黒姫高原で考えたこと」を日本放送出版協会より刊行。 11月 「クリスマスベア」(訳・堤江実 絵・古山浩一)をアートデイズより刊行。
2004年	3月 絵本「しっぽ」(絵・杉野宣雄)をアートデイズより刊行。 6月 「森にいこうよ！(地球絵本)」(訳・松岡達英)を小学館出版より刊行。 7月 「魂のレッスン ぼくとモーガン先生の日々」(訳・森洋子)を日本放送出版協会より刊行。 12月 「誇り高き日本人でいたい」(訳・鈴木扶佐子ほか)をアートデイズより刊行。

年 月	内 容	
2005年	4月～	毎日小学生新聞に「夢追い人グリフィン」を連載。4月5日から翌年の5月30日まで59回の長期連載。少年時代の3年間をすごした英国のコッツウォルズでの体験を基に、少年と動物たちとの交流を描いた物語。
	5月	「緑の時代」をつくる」(訳・天野礼子)を旬報社より刊行。
	5月	「特務艦隊」(訳・村上博基)を文藝春秋より刊行。
	6月	「遭敵海域」文庫版(訳・村上博基)を文藝春秋より刊行。
	10月	英国政府より大英勲章(MBE)を授かる。東京の英国大使館にて授与式とパーティーが行われる。
2006年	12月	ラボ教育センター40周年記念として三つのテキスト「妖精のめ牛The fairy cow」「サケ、はるかな旅の詩The Songs of the Salmon」「はだかのダルシン」を刊行。
	12月	「ことばと自然 ―子どもの未来を拓く―」(言語学者の鈴木孝夫慶應大学名誉教授との共著)をアートデイズより刊行。
2007年	6月	「住まいづくり選書1 子育て日和」をミサワホーム総合研究所より刊行(共著)。
	7月	「子どもだって哲学2 自分ってなんだろう」を佼成出版社より刊行。
	7月	「鯨捕りよ、語れ!」(訳・森 洋子、栗原 紀子)をアートデイズより刊行。
	8月	「原日本人やーい!ーあん・まくどなるど対談集」をアサヒビールより刊行。(共著)
	11月	「マザーツリー 母なる樹の物語」を静山社より刊行。
2008年	5月	「特務艦隊」文庫版(訳・村上博基)を文藝春秋より刊行。
	8月	「裸のダルシン」文庫版を小学館より刊行。
	12月	「鹿肉食のすすめー日本人は鹿肉で救われる」(訳・鈴木 扶佐子/写真・南 健二)を東京環境工科学園出版部より刊行。